

# 「職業訓練原理」を語る意義

## —学生・受講生の自信と誇りを確立するために—

職業能力開発総合大学校 田中 萬年

### 1. 職業訓練の人間形成力

職業訓練が人間形成にとってきわめて重要な意義があることは周知のことである。中学校で登校拒否児だったK君は、職業能力開発校に入り皆勤賞を取って就職し、自信をもって仕事と勉学に励んでいる<sup>1)</sup>等の話は枚挙にいとまがない。高校で“不適応”を起し中退した青年が職業能力開発を終えて立派に活躍している話もよく聞く。そして、小中高でいわば“落ちこぼれ”だった生徒が能開短大に入学し、実際にものを造る楽しさを知り、それまで大嫌いだったはずの勉強も楽しく感じるようになり、“モノづくり”をベースに理論を勉強したいと考え、文部系の大学院（大学院大学）へ入学することが決まった応用課程の学生もいる。当然、在職者、離転職者には職業訓練の意義を十分に理解してもらっている。

### 2. 受講生の期待

上のように、職業訓練が人間形成力として機能しているため、能開総合大へ編入してくる能開短大の専門課程卒業の学生は職業訓練に対する自信と確信をもっている、と私は感じていた。したがって、そのなかから、優れた指導者が出ることは当然と言えた。しかし、能開総合大を含め、新能開大、能開短大への新入生が自覚と誇りを持つための指導が十分にできているかという点、われわれが見落としていた視点があったようだ。それは、旧能開大への編入生が筆者の講義に記した次のような意見に現れている<sup>1)</sup>。

職業訓練の種類と基準というテーマで講義がありました。この手の内容をなぜ能開短大や各種施設で伝えてもらえないのでしょうか？平成元年に小平の東京短大に入学して5年ほどたちますが、こんな話を聞いたのは今日が初めてです。関連施設に通う人すべてに伝えるべきだと思います。

このような意見・感想を編入生が記すのは珍しい。しかしながら、この問題の解決はほとんど看過されてきたのではなかろうか。

編入生は専門課程を修了してきたのであり、すなわち「職業訓練」の修了者である。このように自分自身が職業訓練を受けてきたという体験は、彼らの意識を大きく覆すようである。

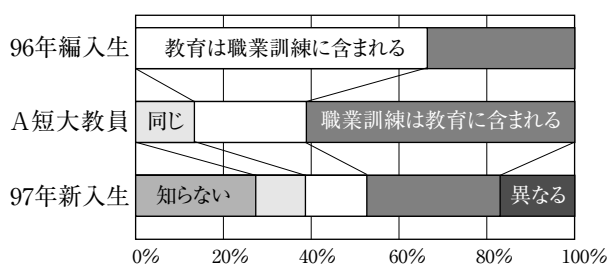
### 3. 関係者の意識の差

筆者は時間に応じ講義の前に、「教育」と「職業訓練」との関係についての次のようなアンケートをとっている。

1. 「教育」と「職業訓練」は同じである。
2. 「教育」は「職業訓練」に含まれる。
3. 「職業訓練」は「教育」に含まれる。
4. 両者は異なるものである。
- 4a. 「職業訓練」は「教育」より低く劣る。
- 4b. 「教育」は「職業訓練」より低く劣る。

その結果は次のグラフに見るように、対象者のキャリアにより明確な差が現れている。

新入生とは、旧能開大入学式直後に実施した新入生であるため、職業訓練を未だ理解していないこと



がわかる。能開大新入生の「知らない」と「異なる」を除けば、能開大新入生とA短大教員20数名の意識構成はきわめて類似していることがわかる。

「教育」とは何か、「職業訓練」とは何か、等についての解説はせず、その時点での回答者の認識が一致していないという厳密さに問題があるが、そのような認識もその時点での受講者の「教育観」であり、「職業訓練観」であると言え、この意識の差は看過できないのではなかろうか。

最も重要な点は、能開大編入生と能開短大教員の意識の逆転現象である。つまり、編入生は能開短大専門課程の修了生であり、かつての職業訓練の受講者であった、ということである。職業訓練の受講者と指導者に職業訓練に対する意識の差が生じている、ということである。

しかし、この現象は不思議ではない。筆者の30年を超える職業訓練観を振り返っても、その大半は「職業訓練は教育に含まれるべきだ」と考えていたし、両者が等しいと考えようになったのは数年前であり、まして、「教育が職業訓練に含まれる」と考えるようになったのはこの1～2年である。

職業訓練を担当している教員側と、その受講者である学生側の職業訓練に対する認識が全く異なるということは、相互のコミュニケーションが食い違い、さらに相互の信頼関係が進まない基盤になりかねないということになる。この問題は能開総合大の学生にとっても同じだと感じている。そのため、筆者が長期課程の学生に実施している講義の立場は、「職業訓練」をいかに理解してもらうか、という点に集約される。これは、職業訓練について語る人の「職業訓練観」であり、だれもが持っているはずである。筆者はそれを「職業訓練原理」と読んでもよいと思う。その場合の筆者の「職業訓練原理」とは、以下

のようになるのではないかと考えている<sup>2)</sup>。

- 1) 「職業訓練」関連用語の意味
- 2) 「職業訓練」の制度の実態
- 3) 「職業訓練」の内容のあり方
- 4) 「職業訓練」の方法のあり方
- 5) 「職業訓練」の歴史の原動力
- 6) 「職業訓練」成立の背景
- 7) 「職業訓練」の意義
- 8) 職業訓練指導員の役割

新入生をグループ分けして担当している「教育訓練概論」は上のような内容を基本としている。

#### 4. 職業訓練観を語る時期

しかし、そのような「職業訓練観」を語る時期はいつが適切であるかといえ、それは最初に紹介した編入生の意見を参考にすべきであろう。つまり、能開総合大への編入生が思うことは、能開短大の学生のほとんどがそのように思うはずだと考える。しかし、能開短大の専門課程では職業訓練に関する講義の基準はない。だからといって、現実に専門課程の学生に職業訓練の意味が語られていない、というつもりはない。短大の教員諸氏の努力で、学生へ職業訓練の意義が語られているはずである。

なぜなら、「職業訓練指導員」試験のなかには「職業訓練原理」が必修として入っている。職業能力開発施設で職業訓練を担当している教員・指導員諸氏は、職業訓練の意味を知っているはずであるが、そのテキストである『職業訓練における指導の理論と実際』のなかの「職業訓練原理」は、きわめて不十分である<sup>2)</sup>のも事実である。

このことに関連して、かつての「技能者養成規程」では、昭和23年の「教習事項」において、「社会」科の「労働」のなかで「技能者養成」を含めて解説するように指示されていた。この指示は、訓練生に対しても技能者養成の意味を理解させることの重要性を示していたと言える。

また、今日の『社会』の教科書は「職業能力開発」を掲げているが、主として職業訓練制度についての解説となっており、職業訓練の意義の理解には十分ではないと思われる。しかも、短大等の高卒の訓練

生には社会を課せなくともよいことになっている。今日のこのような現状は、さまざまな角度から打開を図るべきと言えよう。

このように考えると、新能開大の「応用課程」において「生涯職業能力開発体系論」が開講されている方針は正しかったと言える。

なお、在職労働者や離転職労働者に「職業訓練観」を語ることは意味がないわけではない。そのことは職業訓練を正しく理解してもらい、同時に職業訓練の支持者になってもらうために有効である。ただ、それらの人々は社会での実践者であり、実力の重要性を知っているため、世論調査でも社会人は学歴の矛盾を学生ほど感じていず、学歴に対する悲観は学生ほど大きくない。そのため、むしろわれわれがそのような認識を学ぶ必要があるのである。

## 5. 職訓短大学生の意見

ところで、その「職業訓練原理」の核心はなんといっても“モノづくり”の意義を語ることである。この問題に絞り、講義をする機会が与えられた。それは山形県立産業技術短期大学の学生に対する講義の依頼である。そこで筆者は「モノづくり学習の意義」について紹介し、任を果たした<sup>3)</sup>。その講義に対する短大生の感想を見ると、以下のように筆者の意図を理解してもらうことができたと思われた。

メカトロニクス科A君：私は普通科の高校から、この学校（メカトロ）に入り、初めて旋盤やフライス盤を使いました。自分ではうまくいっているつもりだけど、結局、きちんとした精度は出せませんでした。初めは、「普通だからしょうがない。」と思っていたけど、後で「才能がないのかなあー」とおちこんでいました。自分のなかでは、実技実習の時間がいやでいやでたまりませんでした。

しかし今回の話のなかで「なぜ実技が必要なのか。」や、経験について「経験はだれからも学べない。自分でやるしかない。」というのを聞いて、何となくやる気が出てきました。

情報制御システム科C君：モノづくりの学習の意味

について、“モノ作り”の重要性と、そのなかにはきわめて重要な「コミュニケーション」が存在していることを紹介してもらいました。

このことを学ぶことができるのは僕達のようなモノ作りを中心とした教育訓練を受けている人たちだけであるので、こういった意味でも、職業訓練あるいは職業能力開発ということがいかに大事な人間としての営みであるかということを考えさせられました。

建築環境システム科D君：「実習場は経験を積むための道場」とお聞きして、本校での実技実習の大切さを改めて実感した。確かに学科で教わったことよりも、体を動かし実習をした方が、頭の中に入る知識の量は違う。それに身に付くのは知識だけでなく技能も身に付く。

でも私が思っていた技能というのは間違っていたようだ。私も、技能を経験修練によって得られる“腕”と考えていた。しかし、技能とは「モノ作りの能力」、「知的熟練」など、腕より頭の知識に分類されるようだった。経験はだれからも学べない。自分でやるしかない。

このように新規学校卒業の職業訓練受講者に「職業訓練観」を語ることによって次のような感想がよく出てくる。

「今まで持っていた自分が受けてきた教育に対する考え方を改めることができ、『目から鱗』であった。」「それまで自分が持っていた『職業訓練』という言葉のイメージが変わった。つまり、それまで『職業訓練』という言葉はあまり良いものではなく、暗いイメージだった。そのため、この大学について人に説明するとき、技術系の大学だとか専門学校みたいな学校という感じで話してきた。しかし、これからは『職業訓練』という言葉で説明したい。」「この学校と自分が選んできた道に一層の自信が持てるようになった。やはり本当の勉強とはペーパーテストで良い成績を残すためのものではなく、生きるための術を学ぶためのものだとは私は考えた。」「『社会に根強く残る問題』『学歴社会』『教育の本質』『職

業訓練に対する世間の冷たさ』『詰め込み型教育』など、普段疑問に思っていたことについて考えを持てるようになった。そしてこれまで受けてきた教育とは何だったのかを考えさせられた。」「今までもやっていたことが吹っ飛び、自信を持てるようになった。」等々である。

筆者の拙い講義であっても、このように“モノづくり”の意味、職業訓練の意義を理解してくれるのである。さらに注目されるのは、意見のなかには次のような今後の決意が表明されている場合がある。

「この学校のために何かしたいという気持ちは、常に持っている。この気持ちをずっと持ち続け、いつかこの学校をよくするため、何らかの活動を行いたい。」「“職業訓練こそ Education である”が一日も早く常識になるよう、応援しています。もちろん、私も戦っていく覚悟でいます。」

このように、能開短大等の新規学校卒業の受講生に対する指導の核心は、「教育が職業訓練に含まれる」という彼らが持つ実感を理論的に整理し、理解してもらえるような「職業訓練原理」（職業訓練観）の解説が必要と言える。

## 6. 「職業訓練観」を語る意義

専門課程等の新規学校卒業の受講者が（言い過ぎを許していただくと）職業訓練についての十分な解説を受けていないとすると、技術・技能の訓練を受けているだけだ、ということになる。このことによって、本人達は職業訓練の意味を理解できないままに技術・技能の修得で終わり、職業訓練を受けたという充足感を持たず、職業訓練で学んだ誇りを持たないのではないかと思われる。

筆者の長期課程学生との接触から想像されるその最大の要因は、「学歴社会」の日本において、職業訓練を高校までに正しく理解していなかった者が、下手をすると職業訓練を軽視、蔑視してきた自分自身が、その職業訓練を受けている、という心の葛藤にあるようだ。この心の葛藤を除去することができない限り、職業訓練の社会的重要性と技能労働者の役割をいくら説いたところで、本人達の心は晴れないのである。なぜなら、明治以来、学校教育は産業

界が要望する人材の供給源であったのである。社会に必要な「人材育成」というだけでは、学校教育と同じなのであり、それでは職業訓練の特色にはならないのである。「職業訓練観」あるいは「職業訓練原理」を語る意義はここにある。

平成11年度より専門学校では「準学士」が取れ、大学3年への編入が可能になっているにもかかわらず、それよりも質実ともに勝ってはいても劣ってはいない教育訓練を受けている能開短大等の自分たちはそれが取れない、という不信が残るはずである。能開総合大の学生は申請すれば学士が取れるが、それでもこれまでに紹介したような意見が出る。その他の新能開大、能開短大では準学士も取れないうえに、職業訓練を受けた誇りもわきあがらないのでは指導者、受講者ともに浮かばれない。そのような学生達に、自信と誇りを持たせることができるのは正しい「職業訓練原理」を理解させることによって初めて可能となるはずである。

このように、新規学校卒業者を対象とした職業能力開発短大等において、職業訓練の意義を語ること、すなわち「職業訓練原理」を語る意味はきわめて大きいことがわかる。それは学生に「学ぶ意味を理解させ、自信・意欲・誇り・自覚を持たせ、社会に立ち向かう勇気を持たせ、職業能力開発の支持者になってもらえる。」ということになる。

宗像元介先生は、かつて「職業能力を身に付けることは労働者にとっての身を守る鎧である」、と論じられた<sup>4)</sup>が、筆者はさらに学生達が「“職業訓練”を理解することは学歴社会で生きぬく“思想”としての“武器”になる」、と確信している。

### 〈参考文献〉

- 1) 拙稿「職業訓練と教育とをめぐる論点考」、『職業能力開発研究第13巻』、1995年3月。
- 2) 拙稿「『職業訓練原理』の構想」、『第7回職業能力開発研究発表講演会予稿集』、1999年10月。
- 3) 拙稿「モノづくり学習の意味」、『山形県立産業技術短期大学校紀要第4号』、1998年3月。
- 4) 宗像元介：『職人と現代産業』、技術と人間、1996年10月。